様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４００４

研究課題名（和文）近世日本における初学教育の研究

研究課題名（英文）Study of Beginner's education in the mid Edo Period

研究代表者
高橋　恭寛（TAKAHASHI, YASUHIRO）

東北大学・文学研究科・研究員

研究者番号：７０７０８０３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、「朱子学」における初学教育書『小学』を江戸期の儒者がどのように用いようと試みたのか、その意識の解明を試みたものである。「朱子学」を奉じた儒者たちが、どのように『小学』を理解していたのかを中心に分析した。同じく「朱子学」を奉ずる者でも『小学』が占める位置は大きく異なる。『小学』を具体的な学習段階として理論化しようと試みた儒者もいた。江戸後期に各地に設置された藩校・私塾において、初学段階に修学のカリキュラムとして一般化してゆく以前には、「朱子学」を奉ずる儒者たちが、学習課程のなかに組み込む理論化に試行錯誤していた姿を明かにすることが出来た。

研究成果の概要（英文）：This paper is a discussion of the views of beginner’s education of the mid Edo Period. Some confucian scholars reflect on giving “Shogaku (Beginners educational books of Neo-Confucianism)” the status of actual curricula. However, “Shogaku has a variety of view. There was Confucian scholar was known to incorporate “Shogaku” into actual curricula. They were to try to explain how to successfully produce academic progress in beginners unfamiliar with Confucianism. We can confirm that thet tried to describe a “Confucianism anyone can learn” and disseminate this approach widely.

研究分野：日本思想史

キーワード：日本思想史　教育思想史　儒学思想史

１．研究開始当初の背景

申請者は、これまで博士課程を通じて、日本近世前期の儒学者中江藤樹（1608～48）の思想を分析し、中江藤樹の思索が〈どうすれば人々を学問へと『いざなう』ことが出来るのか〉という問題意識で一貫していたことを明らかにしてきた。中江藤樹という儒者が、自らの理解し、解釈した独自の思想的世界をただひたすら外部へと主張することに終始したのではない。眼前の学習者に対して〈どのようにすれば学問成就が果たせるのか〉などについて、繰り返し教導していたのである。

しかし、現実に全ての学習者が中江藤樹のような大儒と同等に学問成就を果たせるわけではない。多くの弟子が儒学学習の道程に苦しむなか、藤樹は〈何から始めればよいのか〉という着手の在り方をも教示する必要があったことを明らかにしてきた。

そのような〈何から始めればよいのか〉という問題設定を、儒学世界全体に広げたとき、朱子学における初学教育書『小学』が浮上してくる。儒教の中心的な経典『大学』に比して『小学』と名づけられた。『小学』を読むことによって、儒教道徳の基礎を学び、スムーズに四書五経などの本格的な儒教思想を体得することが出来るとされるのである。しかし、この『小学』というテキストは、様々な漢籍の抜き書きによって構成されており、朱熹独自の主張というものが基本的に述べられていない。そのため、近世日本社会における『小学』の活用に関しても、ほとんど先行研究として取り上げられてはこなかった。

確かに『小学』の利用は、大成した中国南宋の朱熹が大成した「朱子学」の学問体系における話である。「朱子学」以外にも、様々な学派が存在し、『小学』利用は千差万別と言える。ただ江戸期の儒者の多くは、尊崇するにせよ退けるにせよ「朱子学」の学問体系が一つの基準となっている。したがって『小学』受容の様子を明らかにすることは、日本における儒学思想の受容について、その一端を明らかに出来るのではないかと考えるに至ったのであった。

２．研究の目的

「朱子学」の学問体系における初学教育書『小学』が、日本の儒者のあいだでどのように受容され、具体的に用いられていたのか、もしくは用いられていなかったのかを解明することによって、儒者たちがどのように儒学という学問を学んでゆけばよいのか、学問成就をどのように進んでゆけばよいのかといった初学段階における課題を『小学』の分析を通じて見ることを目的とする。

それによって、近世教育史研究では藩校教育や学塾内での学習カリキュラムや学習テキストの取り扱いに注目が集まっていたのに対して、そもそも儒学教育の初心者に向けて、どのような学習態度を求めていたのか、学問意識の実際について考察する材料を提供することが出来る。一方、儒者が『小学』をどのように受容し展開させたのか、という内在的研究であるとともに、なぜ『小学』を必要としたのか、というその儒者の教育的課題に焦点をあてることによって、『小学』利用をはじめとする〈初学者教育〉という課題が、近世教育思想史と儒学思想史研究の架け橋となるトピックとして成立することを期するものである。

３．研究の方法

様々な儒者の『小学』注釈書を可能な限り収集するところから始め、個々の『小学』注釈書を分析し、儒者それぞれの『小学』理解を試みる。それによって、日本近世における初等教育の一端を解明する。一方で、日本の儒者が著した様々な儒学入門書を参照することで、日本儒学の初等教育全体に『小学』を位置づける。

そのような『小学』分析は、ある儒者が〈初学者をどのように教導しようとしたか〉という意図を明らかにするだけではなく、その時代に何故『小学』を用いねばならなかったのか、『小学』の注釈書を著さねばならなかったのかといった時代背景をも見通すことが可能となるのである。

とりわけ、朱子学体系を実際に学習して、様々な著作をのこした京都の町儒者・中村惕斎（1629―1702）が初学教育をどのように論じていたのか、また「朱子学尊崇」と見なされ、日本において本格的に朱子学の学問体系を導入したことで世間に知られる山崎闇斎の学派「闇斎学派（敬義学派）」の三宅尚斎は、実際の学塾の教育カリキュラムに『小学』を組み込んだことは知られている。三宅尚斎（1662‐1741）とその弟子の蟹養斎（1705―1778）がどのように『小学』を用いていたのかを見てゆくことにした。

４．研究成果

(1)江戸前期における初学教育の模索

江戸前期社会においては、儒学関係書籍も普及しておらず儒学自体の知名度が低かったという事情もあり、松永尺五『彝倫抄』に代表されるように、儒学思想に関する思想解説書が中心であった。仮名草子などのスタイルで、儒学の学問内容を分かりやすく記す書籍が一般的であり、「朱子学」における初学教育書『小学』をどのように活用するのか基本的に言及が無い。

儒学経典を中心に、儒書の出版に力を入れていた儒者として中村惕斎や貝原益軒が挙げられる。彼らもまた初学者に向けた教訓書の執筆に熱心な人物たちであった。そして、惕斎・益軒にはそれぞれ『小学』解説書と言える出版物がある。ただ、惕斎『小学示蒙句解』は訓点を振り、和訓を付けたに過ぎず、貝原益軒『小学句読備考』は中国の陳選『小学句読』に訓点を振ったという域を出ていない。『小学』の利用は中国由来の解釈をかみ

砕く程度に論ずるに留まっているが、儒書の出版によってテキストを整えてゆく必要のある 17 世紀の儒学世界の『小学』活用とは、この次元に留まらざるを得なかったと言える。

ところで貝原益軒は『初学知要』を著し、中村惕斎は『入学紀綱』を著し、初学者が学ぶべき内容について記述している。

しかし、益軒も惕斎もともに「朱子学」に対して篤実な儒者であったため、その学問内容も同時期の伊藤仁斎などに比べれば独自色が大変薄い。惕斎の『入学紀綱』からは、惕斎が学習者たちに体得してもらいたい学問内容について言及されているが、その内容は基本的に朱子学の修養論の「再編集」に他ならない。

17 世紀の儒者は、学習者に語る際にも、まず満足にテキストが流布しておらず、自らが理解したなかで〈何を学ぶべきか〉を提示することが求められていたと言える。

(2)闇斎学派における『小学』の位置づけ

そのようななか、『大和小学』を著して自らの学問に『小学』を組み込んだのが山崎闇斎である。『小学』の積極的利用は闇斎学派のなかでも浅見絅斎（1652‐1711）・三宅尚斎（1662‐1741）という闇斎高弟によるものであることが知られている。この闇斎学派は、『小学』を初学段階で読了することに関しては自覚的であった。実際、『小学』注釈書を書き残したのは闇斎学派が多数を占める。とりわけ三宅尚斎に関しては、庶民教育に『小学』の理念を踏まえたことが嘗て阿部吉雄「三宅尚斎の庶民小学教育説と培根達支堂」（『漢学会雑誌』第 8 巻第 1 号、1940）によって明らかにされている。三宅尚斎は、『小学』を子供のための書としてではなく、一般庶民をはじめとして誰もが読むべき書として提示したことで知られる。三宅尚斎の私塾「培根達支堂」は、初学者用の「培根堂」と次の段階である「達支堂」という 2 つに分かれる。その片方の「培根堂」において、庶民にも『小学』を学ばせることを説いたしかし三宅尚斎は、庶民教育に『小学』の読書を組み込み実践したが、その理論的根拠については深く考察していない。それならば、このような三宅尚斎の『小学』教育の実践は、どのように展開していったのか。

「朱子学」で中心的な課題とされる「窮理」（自己・万物に備わった〈道理〉を窮めること）や、「修身」（一身における道理を体現すること）などは、『小学』を修めた次の段階であり、儒教の中心的経典「四書」（『大学』・『論語』・『孟子』・『中庸』）を読む次元での話である。「朱子学」においてまずは『小学』において「事」の次元を学び、そして『大学』の段階において、その「小学の学ぶ所の事の所以を学ぶ」とされた。尚斎にしても浅見絅斎にしても、『小学』を読むことでどのようにして『大学』への段階へと接続出来るのか、その説明を詳しくしてはいなかった。

これに対して三宅尚斎門下の蟹養斎（1705‐1778）は、師の教えを継承しつつ、学問階梯について独自の説明を加えるのであった。

(3)蟹養斎の初学教育論

蟹養斎は、名古屋の藩校「明倫堂」の前身たる「巾下（はばした）学問所」において教育を担ったことで知られる。

三宅尚斎の「培根堂」「達支堂」という二段階の階梯論を継承し、「新学」「久学」という二段階と、さらにそれぞれに「新学上座」「久学上座」という上段階を設けている。それぞれの段階において行うべき学習内容（素読・会読など）があり、学ぶべき書籍を設定した。

このように学習者に向けた学習階梯論などを構想し、『諸生規矩』『諸生階級』などを著した。ただ、単に学塾における学習課程について積極的に講じただけではなかった。養斎は、『小学』や初学教育に関して、様々な著作をのこした人物であった。

養斎という人物は、『教学仰食説』（養斎 30 歳）のような若い時期の著作からも窺えるように、初学者が何から学問を始めればよいのかという〈標的〉さえ把握しきれない存在であることを理解していた。それを踏まえて初学者に向けて『小学』がどのように学問成就の道を辿るのか、その理論構築を深めていったのであった。

蟹養斎にとって『小学』とは、道理を〈粗々〉学ぶものであった。具体的に「理」について学ぶのは『大学』の段階である。しかし、いきなり道理を『大学』の段階で学ぶのではなく、『小学』であれば『小学』の段階なりに、「理」を把握することが『小学』学習には求められていると養斎は考えていた。そのようにすることで、『大学』において「窮理」へと着手出来るのである。

以上のような『小学』の位置付けを試みたのも、初学者がどのようにして学問成就を果たせばよいのか、共有されていなかったからに他ならない。養斎が活躍した 18 世紀半ばは、藩校も各地で設置され始め、修学人口が段々と増えてゆく時期にあたる。つまり、蟹養斎による『小学』利用の理論化は、儒学という学問が人々へと開かれてゆく時代を前にして、初学者がどのように学問を進めてゆけばよいのかという理論的考察も含め、多くの儒者の関心外だったという当時の学問状況が見えてくる。体系化された「朱子学」という儒学思想を多くの人々へと教示するためには、単なる学問階梯を明示するだけでは不十分であるという課題が浮上してきていたことが窺える。

この後、17 世紀末、「朱子学」を「正学」として再評価する尾藤二洲や頼春水のような人物があらわれる。寛政改革における学問所の制度確立と相俟って、「朱子学」の学習形態が一般化してゆく。

尾藤二洲は、倫理思想に特化した形で朱子学を再解釈し、「致知格物」を解説して、実際の事物の則を推し極めること（格物）によって人倫の実践が達せられるべきこと（致知）を、『大学指掌』などで論じていることは知られている。道徳的な完成を目指す学問として儒者のあいだでも共有されてゆく。

そのようななかで『小学』もカリキュラムの一つとして構築されてゆくが、そこでは蟹養斎ほどに『大学』との接続などの理論化を説かない世界が展開されてゆく。

(4)河口静斎による『小学』の対象化

蟹養斎に代表されるように、『小学』が何故学習者に必要とされているのか、その説明が必要なのは、具体的な対象の存在が大きい。蟹養斎の場合、これまで学問世界には縁の薄かった多数の初学者であった。そして、養斎と同時期に活動した河口静斎（1703‐1754）の場合は、古文辞学の太宰春台であった。

荻生徂徠の弟子である太宰春台（1680‐1747）は、『朱氏小学論』という『小学』を批判した文章を残している。

春台からすれば、朱熹の『小学』は学習者のための書とは呼べないものであった。その理由として春台は、『小学』に載せる礼法が童子ではなく、より大きくなった者たちへの教示内容であることや、更には学ぶ者へ向けた書というよりも子供たちを教誨する者の教えに終始していることなどを挙げている。

これに対して、室鳩巣の弟子にあたる河口静斎は、春台の批判を受けて『小学』を弁護するため、『太宰氏朱子小学弁』（あるいは『静斎小学弁評』）という書を著した。

静斎は、そもそも『小学』を「童子（成童以下の子）」の学問と規定すること自体を批判し、『小学』の学びも終身の学問であると述べるように、春台による『小学』理解それ自体を否定しながら『小学』を意味づけてゆく。『太宰氏朱子小学弁』は、春台が論じた一節一節への反駁のみではなく、「小学論」という一文を付して上述の『小学』が童子の学ではないという点について論じている。地方でも刈田郡平沢村主を勤めた仙台藩士高野倫兼（1701 年～1782 年）が、『高野家記録』「退隠記」で『小学』の重要性を説いたのも同時期である。この頃地方においても『小学』は、道徳的な完成を目指す書として童子以外の者でも読むことが流布し出した時代であると言えるであろう。

一方、仮名草子のような仮名書き教訓書や往来物など童子向けの書籍が多数出回るなか、経典を中心にした諸書の抜き書きとも言える『小学』が果たして童子向けと言えるのか、現実的に考えたとき、子供向けという立場を堅持することは困難であったと思われる。そこで、学問をはじめる者であれば誰もがまず読まねばならない書物という方向へと河口静斎のように、一つの意味付けを試みた儒者があらわれたことが窺えるのである。

(5)『小学』読書が一般化した江戸後期

江戸後期、『小学』も講読書の一つとして採用した藩校でも、初学段階に『小学』を位置づけたところばかりではない。単なる儒教的教訓書の一冊としての色彩が濃く、経書の一つの扱いとなる藩校が多数存在した。このように「朱子学」を奉ずる儒者たちは、蟹養斎や河口静斎の時代を経ることによって、単なる子供向け教育書という方向から、誰もが読まねばならぬ教訓書というかたちで『小学』を取り上げるようになった。それは無論、「朱子学」を奉ずる儒者に限られてはいる。

江戸期において教訓書は、17 世紀前半に教訓的な仮名草子が登場したことにはじまり、『実語教』や『三字経』などが往来物のかたちで刊行され、教訓書は多くの人の手の届くところにあった。『小学』もまた惕斎・益軒にはじまる和訓を付して刊行されたように、他との違いはない。ただその一方で『小学』は、藩校をはじめとした学塾でのカリキュラムに組み込まれ、儒書という位置付けは最後まで変わらなかったと考えられる。

むしろ、『小学』が子供向けの教訓書という見方ではなく、誰もが学ばねばならない道徳書という位置付けを手に入れることになった。本来的には外来の学問世界であった儒学を導入しようとした際、如何にして学び始めることが出来るのか、という試行錯誤が江戸期の儒者のなかにはあった。単に「朱子学」から受け取った学習階梯のみで事足りるとした者ばかりではなかった。『小学』利用の軽重には、そのような儒学をどのようにすれば人々に伝えられるのか、という意識の違いとして表れているとも言える。

(6)おわりに

本研究では、これまで具体的に取り上げた儒者以外にも、多くの儒者が著した『小学』関連テキストを確認してきた。その一端を挙げるならば以下の通りになる。

大月履斎『小学口義』、川島栗斎『小学講義』、北沢遜斎『小学講義』、田辺楽斎『小学筆記』、谷秦山『小学晩進録』、中井履軒『小学雕題』。

これらは基本的に内容の和訓が中心である。そもそも『小学』という書物が、様々な漢籍からの抜き書きで構成されているという特徴から、各条の元になった出典や文中のことばについても注釈を付されているものが少なくなく、儒者の見解をそのまま読み解くことは難しかった。多くの場合、『小学』はあくまで道徳教育へと資する漢籍の一つと見なされていたと言えよう。

江戸期の日本における儒学の位置は、中国における「科挙」のような社会的位置を有するわけではなかったことには言を俟たない。『小学』を初学者向けの学習階梯のなかに設定しようと試みる儒者がいる一方で、あくまで『小学』を修養論の一漢籍としてしか見ていない儒者も少なくはなかった。それは、儒

学教育とは何かという意識の違いである。学習階梯の先に如何なる人格形成が存在するのか、『小学』が必要なのか、『小学』抜きでも描き出せるのか、それぞれの違いが表れるのである。

以上のように『小学』を中心とした、儒学における初学教育への意識が、「朱子学者」のなかでも多種多様であり、重点の置き所に違いがあったことが判明したと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
高橋　恭寛、蟹養斎における『小学』理解から視た初学教育への視線、道徳と教育、査読有、第 333 号、2015、pp.3－pp.14

〔学会発表〕（計 6 件）
① 高橋　恭寛、蟹養斎『勧学』からみた初学教育の焦点、多文化視野の中の日本学フォーラム、2014.9.20、山東大学（済南・中国）
② 高橋　恭寛、蟹養斎の『小学』利用のかたち、日本文芸研究会第 66 回研究発表大会、2014.6.15、東北大学川内南キャンパス（宮城県仙台市）
③ 高橋　恭寛、科研費報告　近世日本における初学教育の研究、日中研究報告会、2014.3.15、北京外国語大学（北京・中国）
④ 高橋　恭寛、徳川儒者による教導のかたち、日本思想史研究会 2 月特別例会「文と武のあいだ」、2014.2.5、東北大学川内南キャンパス（宮城県仙台市）
⑤ 高橋　恭寛、蟹養斎における『小学』の位置、日本思想史研究会（京都）例会、2014.1.16、立命館大学衣笠キャンパス（京都府京都市）
⑥ 高橋　恭寛、中村惕斎の修養論、2013 年度日本思想史学会大会個別発表、2013.10.13、東北大学川内南キャンパス（宮城県仙台市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　恭寛（Takahashi，Yasuhiro）
東北大学・文学研究科・研究員
研究者番号：70708031

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：